

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	フィールドワークを通して見る奄美喜界島方言
Author(s)	白田, 理人
Citation	論叢 国語教育学 , 18 : 65 - 74
Issue Date	2022-07-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/53669">10.15027/53669</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/53669">https://doi.org/10.15027/53669</a>
Right	
Relation	



## フィールドワークを通して見る奄美喜界島方言

白田 理人

### 1 はじめに

本稿は、筆者が2021年7月17日の第23回国語教育カフェ夏において行った講演「フィールドワークを通して見る奄美喜界島方言」の内容を再構成して紹介するものである。筆者は、琉球列島で話される言語変種のうち、主に喜界島方言を対象に、フィールドワークに基づく総合的な言語記述・記録と、当該方言に特徴的な現象の分析を行っている。以下、講演内容に従い、まず、2節で、筆者の研究対象である琉球諸語・喜界島方言について概説する。次に、3節で、消滅危機言語の調査研究の枠組みを導入し、筆者の経験を踏まえて、調査研究活動の実際について紹介する。続いて、4節で、筆者による喜界島方言の調査研究例として、島内北部の小野津集落の方言の「中舌母音」と一人称代名詞複数の体系を取り上げる<sup>1</sup>。5節は結語である。なお、本稿は学術論文ではなく講演録であるという位置づけから、詳細な引用を省略している。表記は、小川（2015）に基づくアルファベット表記（及びかな表記）を用いる。

### 2 琉球諸語・喜界島方言

#### 2.1 琉球諸語

琉球諸語は、鹿児島県の奄美群島及び沖縄県で伝統的に話されている。基礎的な語彙の共有などから、本土の日本語と同系統の言語であると認められており、「琉球方言」と呼ばれることもある。しかしながら、本土の日本語諸方言との相違が大きく、さらに、島と島の間（場合によっては、同じ島内の集落同士の間）で相互理解可能性を欠くほど多様性に富んでいるため、複数の言語（奄美語・沖縄語・宮古語・八重山語・与那国語など）を認めた「琉球諸語」という呼称が広まりつつある。琉球諸語は、日本語本土諸方言が失った音や文法・語彙の特徴を保存しており、日本語の歴史的研究に資するデータを含んでいる。また、琉球諸語には、その多様性から、世界の諸言語の中でも言語類型論的に興味深い特徴が見られる。2009年に、ユネスコは、日本における消滅危機言語として、アイヌ語・八丈語とともに、六つの琉球諸語を認定している。

#### 2.2 喜界島方言

喜界島は、奄美群島のうちの一つであり、行政上は鹿児島県大島郡に属している。琉球諸語が話される地域のうち、最も北東に位置している（地図1参照）。島内に30余りの集落があり、方言の集落差は比較的大きく、音や活用語尾・助詞などにバリエーションが見られる<sup>2</sup>（(1), (2)参照）。

<sup>1</sup> 講演では、島内南部の上嘉鉄集落の方言の疑問文についても論じたが、紙幅の都合により割愛する。上嘉鉄方言の理由疑問詞 *nuwa*（ぬわ）の特殊性については、白田（2019）を参照されたい。

<sup>2</sup> 講演では、島内南部の上嘉鉄方言による会話の動画を提示し、助詞などに...en という音形が見られる同方言の特徴を確認した。この会話の文字化資料は、白田（2013）に収録されている。

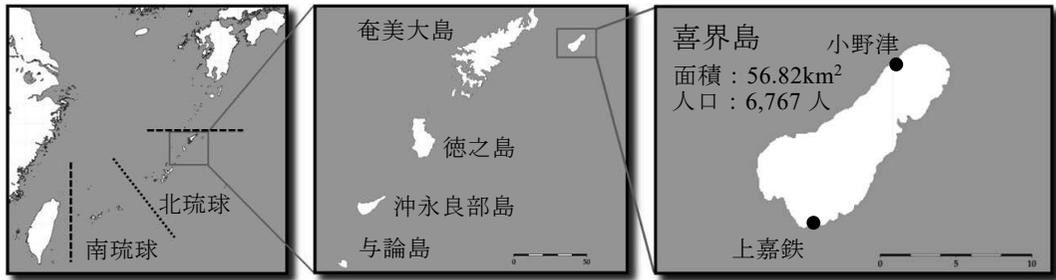


図1 琉球列島とその周辺／奄美群島／喜界島（小野津集落・上嘉鉄集落の位置）<sup>3</sup>

(1) 音の方言差

a. 小野津方言（島内北部）

k'in (きん)「着物（キヌ由来）」、kyoodee (きよーでー)「兄弟」、abi (なぶい)「鍋」

b. 上嘉鉄方言（島内南部）

chin (ちん)「着物（キヌ由来）」、soodee (そーでー)「兄弟」、nabi (なび)「鍋」

(2) 活用語尾・助詞の方言差

c. 小野津方言（島内北部）

iji-ti (いじ-てい)「出て」、-chi (-ち)「～と（引用）」

d. 上嘉鉄方言（島内南部）

iji-yen (いじ-いえん)「出て」、-ten (-てん)「～と（引用）」

喜界島方言の流暢な話者は概ね 50 代後半～60 代以上であり、集落ごとの方言の話者は数十人～数百人程度と考えられる。伝統方言を聞いて理解するのは主に 30 代後半～40 代以上である。母語話者による語彙集（岩倉 1941）があり、また、アクセントの記述（上野 1993、上野・西岡 1994 など）は比較的豊富であるが、筆者が研究を開始した 2010 年時点で、先行研究・資料はさほど多くなく、特にテキスト資料（方言による自然会話や民話などを文字化した資料）は少ない状況であった。

### 3 消滅危機言語の調査研究の枠組みと実際

#### 3.1 研究の枠組み—言語の記録の三点セット・記述言語学

喜界島方言のように、話者数が少なく、若い世代に継承されず、消滅の危機に瀕している言語の調査研究の出発点は、話者数が多く、若い世代に継承されている言語とは異なるものとなる。消滅危機言語・方言は、母語話者の研究者がおらず、書記法が確立されておらず、研究蓄積に乏しいことが多い。このような状況で研究を開始するには、まず、その言語の全体的な特徴を掴む必要がある。言語の全体像を記録する上で、「ボアズ<sup>4</sup>の三点セット (Boasian trilogy)」と呼ばれる、辞書（言語におけるそれぞれの語彙の形式と意味・用法）、文法（言語の仕組み、法則）、テキスト（「教科書」

<sup>3</sup> 国土地理院発行の地図データをもとに Thomas Pellard 氏 (CNRS, CRLAO) が作成した地図を編集して用いている。人口は喜界町発行の資料に基づく、2021 年 4 月 1 日現在のものである。

<sup>4</sup> フランツ・ボアズ (Franz Boas, 1858-1942) は、ドイツに生まれ、アメリカに移住し、ネイティブ・アメリカンの言語の研究を行った人類学者である。

ではなく、民話や自然会話など、言語の実際の使用例を文字化したもの)の三つが重要であると言われている。ここでいう文法とは、語学の学習における文法のように、この言語はこう使うべき、という規範を述べた「規範文法 (prescriptive grammar)」ではなく、言語の使用実態に即して、ありのままを記述した「記述文法 (descriptive grammar)」である。より具体的な中身としては、どのような音の区別があり、音の配列にどんな制約があるか、個々の語がどのような構造をもつか、語順や文の構造はどうなっているか、といった体系・規則を扱う。言語学のうち、言語に内在する構造を帰納的一般化によって掘り起こすことで明らかにする分野は「記述言語学」と呼ばれる。2000年代後半以降、琉球諸語の記述言語学的研究が活発になってきた。従来の方言研究は、琉球諸語の研究も含めて、現代日本語全国共通語(以下共通語)と比較して特徴的な点のみを扱うことが多かった。また、各方言の個別の体系を顧みず、共通語の枠組みを当てはめて分析する傾向が見られた。一方で、記述言語学的な方言研究(及び琉球諸語研究)は、共通語との類似や、共通語における分析の枠組みを前提とせず、各方言のデータからボトムアップ的に個別の体系を明らかにしている。

### 3.2 データ収集方法—質問調査及び自然談話収集調査

消滅危機言語の記述言語学的研究では、基本的に、フィールドワークによって言語データを収集する。フィールドワークでは、当該言語が話される地域に赴き、話者を協力者として調査を行う。調査のタイプとして、大まかには、質問調査と自然談話収集調査がある。質問調査では、質問票を用意し、主に媒介言語(琉球諸語の場合は共通語)からの翻訳によってデータを得る。質問調査には、的を絞って効率的にデータを収集でき、また、「○○という言い方はできない」という否定証拠(negative evidence)を得ることができるというメリットがある。一方で、基本的には予想した言語形式・構造についてのデータしか得られず、また、媒介言語の影響を受けやすいというデメリットがある。自然談話収集調査では、まず、話者に方言を使って会話してもらったり、民話を語ってもらったりして音声を録音する(また、可能であれば映像を録画する)。次に、録音された音声を話者とともに聞き、発話の書き起こしと意味の確認を行い、よりメジャーな言語による翻訳・語釈を付けたテキスト資料を作成する。自然談話収集調査では、媒介言語の影響を避けることができ、また、調査者が予期しないデータを得ることができるというメリットがある。一方で、書き起こしに多大な時間と労力が必要になるというデメリットがある。また、話者が当該言語で自然に話せるように環境づくりを行ったり、テキスト資料としての公開に適した内容になるように注意し、内容によっては公開を控えたりするなど、質問調査とは異なる配慮が必要になる。質問調査と自然談話収集調査は、どちらか一方のみを行うのではなく、質問調査で得た知見を活かして自然会話などの書き起こしを行い、書き起こしの過程で未記述の言語形式・構造を見つけ、その機能などを質問調査で精査する、というように、並行して繰り返し行うことで、当該言語の記述を深めることができる。

### 3.3 調査研究活動の実際(話者探し・機材・調査方法・データ管理・分析補助ツール)

フィールドワークによる言語調査では、まず、調査協力者となる話者を探すことが重要になる。地域によって事情は異なるが、例えば、教育委員会や、区長・民生委員などの紹介で、当該地域で生まれ育った話者に接触し、調査の目的・内容・予定している成果を説明し、協力を依頼する。協力者と調査者の関係は、フィールドワークに大きな影響を及ぼすため、協力者と十分にコミュニケーションを取り、信頼関係を構築しながら調査に取り組むことが必要である。また、協力者となる話者の性質を見極めながら、それぞれの話者の性質にあった調査方法から始めるほうが円滑に調査

を行える場合がある。例えば、「ことばの調査」であることを十分理解し、調査者の意図を汲んで説明・翻訳を行うことに長けている「解説者」タイプであれば質問調査向きであり、話し好きで、調査場面でも共通語を混ぜずに話してくれる「語り手」タイプであれば自然談話収集調査向きである、といったことが言える（ただし、調査を繰り返す中で、協力者側も調査方法に順応していく）。

フィールドワークの際の持ち物としては、話者の情報を記録するためのフェイスシート、調査協力及び音声・映像などの利用に関する同意書、録音機材（図2参照）・録画機材（ビデオカメラ・三脚）・書き起こし機材（ノートパソコン・スピーカー）、話者へのおみやげなどがある。



図2 録音機材（例）

質問調査の実際について、まず、話者に単語や文を発音してもらいだけでなく、調査者がそれをリピートし、間違いがないか話者に確認してもらうことで、調査内容を確実なものとするのが重要である。また、記述の詳細化には、調査者が作例を行い、これに対して、話者からの「○○と言うのは、その方言の発話として自然である」あるいは「△△と言うのは、その方言の発話としては不自然である」という容認性判断を得ることが有効であるが、調査者の意図が十分伝わっていなければ誤った結果になるため、注意が必要である。自然談話収集調査で得た例に手を加えて利用したり、文脈を細かく説明したりすることで、調査者の意図が十分伝わるように配慮する。容認されない例であれば、問題となる箇所のみを入れ替えた対照例を作り、それが容認されることを確認する。容認される例であれば、「自然である」というコメントを得るだけでなく、話者にその例を発話してもらう。以上のような手順により、容認性判断の確実性を高めることができる。

自然談話収集調査の実際について、まず、話者にできるだけ普段通りに話してもらう工夫が必要になる。具体的には、協力者となる話者が一人の場合は調査者が方言であいづちを打ち、話者が複数の場合は調査者を見ずに話者同士で会話してもらう、といった工夫により、調査場面の発話への影響を軽減することができる。次に、内容について、調査対象の方言による会話として適当であり、話者から公開の同意が得られるものであれば基本的には何でも構わない。筆者の場合、これまで、地域行事、伝統料理、子供の頃の遊びなどを話題とする資料の収集を行ってきた。世代差のある組み合わせの場合、若い方にインタビュアーになって話題を振ってもらうことで、スムーズに会話を進められる場合がある。録音後の書き起こしの作業では、音声を少しずつ区切って話者に聞かせ、録音された発話を繰り返してもらい、「方言として何と言っているか」を確認し、次に、「どうい

意味か」を説明（共通語に翻訳）してもらい、それぞれを調査者が文字化する。確認や説明は発話した本人に頼むのが良いが、難しい場合は他の話者に行ってもらおう。「言い間違い」「言いよどみ」「共通語が混じった」といった判断も同時に記録する。プライバシーに関わる内容が入っていないか、公開して問題ない内容かの確認を行う。これに基づき、録音データ・録画データ・書き起こされたテキストなどのデータについて、話者に対して、利用目的・利用者の範囲・話者の権利（データの編集・削除）を説明した上で、利用に同意した旨を示す文書に署名してもらおう。

録音データなどの管理にあたっては、「メタデータ (metadata)」と呼ばれる、データに関するデータを併せて管理することが重要になる。近年、言語の一次データ（音声・映像・テキスト）を、調査者個人が特定の言語現象の観察に利用するためのものと位置づけるのではなく、多くの研究者や話者のコミュニティが多目的に利用可能なものにしようとする「言語ドキュメンテーション」の考え方が広まりつつある。言語ドキュメンテーションにおいては、様々な場面・ジャンルの言語活動を記録し、メタデータとともに共有することで、調査者本人以外もデータを有効に利用することが可能になる。メタデータの内容・体裁としては、話者の情報・調査セッションの情報・音声データなどのファイルごとの情報（(3)参照）を表形式で記録したものが一般的である。メタデータの管理と並行して、一次データの電子ファイルについても、ファイル名の付け方やフォルダへの格納のルール（(4)参照）を決め、バックアップを取ることで、適切に管理を行うことが重要である。

### (3) メタデータの内容（例）

#### a. 話者の情報

生年月日、性別、出身地、両親の出身地、配偶者の出身地、居住歴、学歴、職業

#### b. 調査セッションの情報

セッション ID（例：言語・方言名の略号＋番号）、セッション名、日時、場所、参加者（話者／調査者）、用いられた言語、トピック、調査タイプ（例：質問／会話）

#### c. ファイルごとの情報

対応するセッション ID／セッション名、ファイル名、使用機材

### (4) 一次データの電子ファイルの管理法（例）

#### a. ファイル名の付け方：セッション ID\_セッション名-ファイルの通し番号

例：ONOK001\_matsuri-1（喜界島小野津方言の最初のセッション「matsuri」の最初のファイル）

#### b. フォルダへの格納：セッションごとにまとめて一つのフォルダに入れる

例：音声データファイル ONOK001\_matsuri-1.wav は ONOK001\_matsuri フォルダに格納

フィールドワークによる言語調査に有用なツールとして、まず、自然会話などのデータの書き起こしに有効な ELAN (<https://archive.mpi.nl/tla/elan> 参照) が挙げられる。ELAN は、音声・映像にアノテーション（注釈）を付けるためのツールである。音声波形を見ながら音声を聞き、発話部分を区切って注釈入力用の枠を作成し<sup>5</sup>（図 3 参照）、区切った部分ごとに音声を繰り返し再生して確認しながら、方言の書き起こしや共通語訳を枠内に入力することができる（図 4 参照）。また、辞書・テキスト資料を管理し、辞書情報にもとづいて半自動的にテキスト資料の形態素分析が行える

<sup>5</sup> 無音区間の音量と最短の無音／有音区間の秒数を定め、有音区間を自動で切り出す機能もある。

Toolbox (<https://software.sil.org/toolbox/>参照)、FieldWorks (<https://software.sil.org/fieldworks/>参照) や、音響分析を行うための Praat (<https://www.fon.hum.uva.nl/praat/>参照) も有用である。

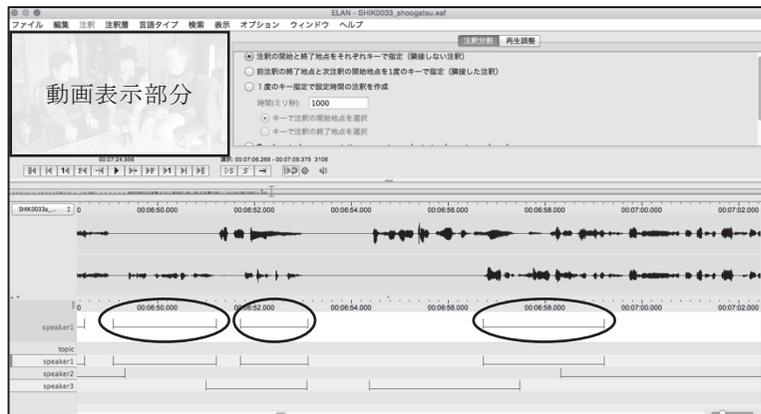


図3 ELAN を用いた発話区間の切り出し (例)

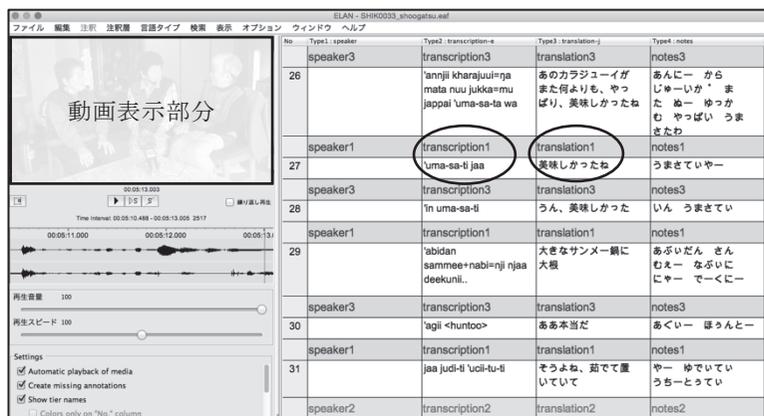


図4 ELAN を用いた方言の書き起こし・共通語訳の入力 (例)

## 4 喜界島方言の調査研究例

### 4.1 「中舌母音」の音響学的分析

奄美大島方言・徳之島方言及び喜界島北部方言では、日本語のエ段母音に対応して、舌の最も高い部分が前舌母音 i (イ) より後ろで、後舌母音 u (ウ) より前に位置する「中舌母音」の i が現れる (例: ami あみい「雨」)。岩倉 (1934: 13) は、喜界島方言の「中舌母音」の i について、「大島本島等に於ける i と異り、u と i を續けて一つに発音するやうな音で ui に聞こえるが、便宜上 i であらはず事にする」と述べている。

この相違について、フィールドワークで得た音声データをもとに、言語音の物理的特性を扱う音響音声学的手法を用いて確認する。前提として、母音の音色は、声帯の振動に基づく音の高さ(「声の高さ」として感じるもの)以外に、どの高さが大きく増幅されたかによって決まる。この増幅された音の高さをフォルマント周波数と言い、低い方から高い方へ順に第1フォルマント、第2フォ

ルマント...と呼ぶ。このうち第2フォルマントは舌の最も高い部分の前後位置と関連し、i (イ)・e (エ) のような前舌母音では高く、u (ウ)・o (オ) のような後舌母音では低くなる。

喜界島北部の小野津方言の「中舌母音」と、これと区別される前舌母音を Praat で分析してみると、「中舌母音」では子音から母音への入り渡りにかけて第2フォルマントが上昇し、前舌母音と同じ高さになっている (図5の矢印参照)。すなわち、子音 m から母音の入り渡りでは舌の最も高い部分が前舌母音より後ろであるが、そこから前に移動してほぼ同じ位置に達していると考えられる。一方、奄美大島湯湾方言の「中舌母音」<sup>6</sup>は、第2フォルマントが前舌母音よりも低く現れる。したがって、舌の最も高い部分の前後位置は前舌母音よりも後ろであると言える (図6の矢印参照)。以上のように、岩倉 (1934) の指摘した特徴が、音響音声学的手法により確認できる。

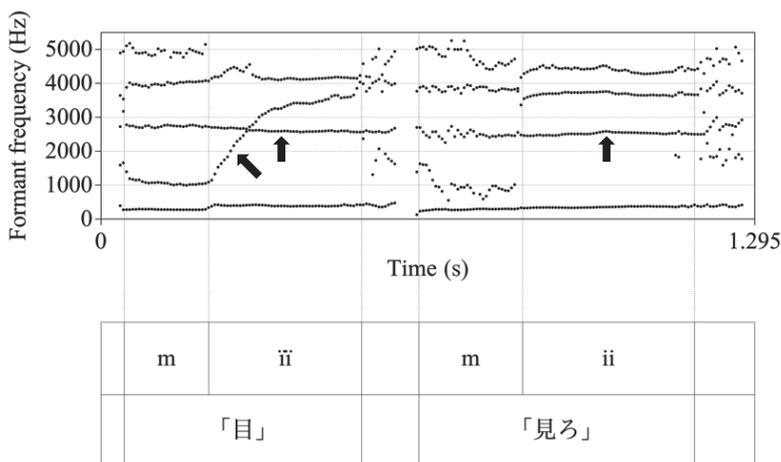


図5 喜界島小野津方言の「中舌母音」と前舌母音のフォルマント周波数の比較

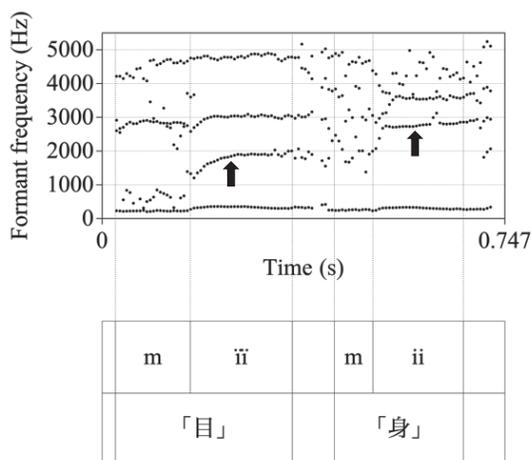


図6 奄美大島湯湾方言の「中舌母音」と前舌母音のフォルマント周波数の比較

<sup>6</sup> 湯湾方言の音声データは新永悠人氏 (弘前大学) の提供による。湯湾方言の「中舌母音」の調音音声学的特徴については、Aoi & Niinaga (2016) を参照されたい。

## 4.2 一人称代名詞複数の体系

喜界島方言においては、一人称代名詞複数（私たち）に、**wannaa**（わんなー）と、**waacha**（わーちゃ）もしくは **waakya**（わーきゃ）という二種類の語形があることが知られている。岩倉（1941）は、この二種類の語形について、「語つてゐる對者」を含むか否かで使い分けがあることを報告している（(5)参照）。

### (5) 岩倉（1941）における喜界島方言の一人称代名詞複数（私たち）

#### a. ワン・ナー（岩倉 1941: 191）

我等。但しこの語は語つてゐる對者を含めずにいふ場合で、對者をも含めて我々といふときはワーチャといふ。

#### b. ワー・チャ、ワー・キャ（岩倉 1941: 161）

吾等、この語は眼前にゐる多数の者を含めて「我々」といふ場合に用ひる。

一般言語学的に、一人称複数に聞き手を含まない場合は「除外（exclusive）」、含む場合は「包括（inclusive）」と呼ばれ、区別されている。喜界島方言の一人称代名詞複数の二種類の語形は、この除外／包括の区別によって使い分けられていると言える。除外／包括の区別は、共通語には見られないが、世界の様々な言語において報告され<sup>7</sup>、他の琉球諸語（沖縄・宮古・八重山・与那国）にも見つかっている。

喜界島北部の小野津方言を例に、二種類の一人称代名詞複数形の違いについて確認する。クラスの集合写真を指して、他クラスの生徒に向かって「これは私たちのクラスだよ」と言う場合には、「私たち」に聞き手が含まれないため、**wannaa** が用いられる（(6)a 参照）。一方、同じことをクラスメイトに伝える場合は、「私たち」に聞き手が含まれるため、**waakya** が用いられる（(6)b 参照）。

### (6) 喜界島小野津方言の **wannaa** と **waakya**

#### a. 【話し手のクラスの集合写真を指しながら、他クラスの生徒に向かって】

hure-e **wannaa** k'umi-doo.

これ-は 私たち（の） 組-よ

「これは私たちのクラスだよ。」

#### b. 【話し手のクラスの集合写真を指しながら、クラスメイトに向かって】

hure-e **waakya-n** k'umi-doo.

これ-は 私たち-の 組-よ

「これは私たちのクラスだよ。」

フィールドワークで収録した自然会話のデータをもとに、質問調査を行った結果、小野津方言に **ariwaakya**（ありわーきゃ）という三つ目の一人称代名詞複数形があることが明らかになった（白田 2014）。**ariwaakya** は、聞き手を含まず、文脈に現れた特定の人物と話し手を含むグループを指す。聞き手を含まない点で、**wannaa** と同じ除外形と言えるが、**wannaa** は、話し手を含む集団として、す

<sup>7</sup> 世界の諸言語の情報を集約した WALS Online (The World Atlas of Language Structures Online) の除外／包括についてのページ (<http://wals.info/feature/39A#2/>) を参照されたい。

で話し手・聞き手が認識しているものを指し、文脈に特定の人物が新たに提示されても、その人物は指示対象には含まれないのに対し、*ariwaakya* は、文脈に現れた人物と話し手を含む集合を指し、談話に導入する機能を持つ。例として、野球の試合について話す文脈で、*wannaa* は話し手側のチームを指し、文脈に対戦相手のチームが現れていても、指示対象には含まれない ((7)a 参照)。一方、*ariwaakya* の場合は、文脈に対戦相手のチームが現れると、対戦相手のチームを話し手のチームに加えた全体を指示し、話し手を含む新たな集合として談話に導入することができる ((7)b 参照)。

(7) 喜界島小野津方言の *wannaa* と *ariwaakya*

a. 【話し手が出場した野球の試合について話して】

k'inyyuu-ya arinna-tu shiyai-ssasu. wannaa-ya k'ibatan-doo.

昨日-は あれたち-と 試合-したの 私たち-は 頑張った-よ

「昨日はあの人たちと試合したんだ。私たち (=話し手チーム) は頑張ったよ。」

b. 【話し手が出場した野球の試合について話して】

k'inyyuu-ya arinna-tu shiyai-ssasu. ariwaakya-a k'ibatan-doo.

昨日-は あれたち-と 試合-したの 私たち-は 頑張った-よ

「昨日はあの人たちと試合したんだ。私たち (=話し手チーム+相手チーム) は頑張ったよ。」

以上をまとめると、喜界島小野津方言の一人称複数体系においては、話し手を含み、聞き手を含まない *wannaa*、話し手と聞き手を含む *waakya*、話し手と、特定の人物を含み、聞き手を含まない *ariwaakya* の三つの語形が区別されていると言える (図 7 参照)。このような体系は、管見の限り他の言語・方言において報告されておらず、珍しいタイプであると言える。

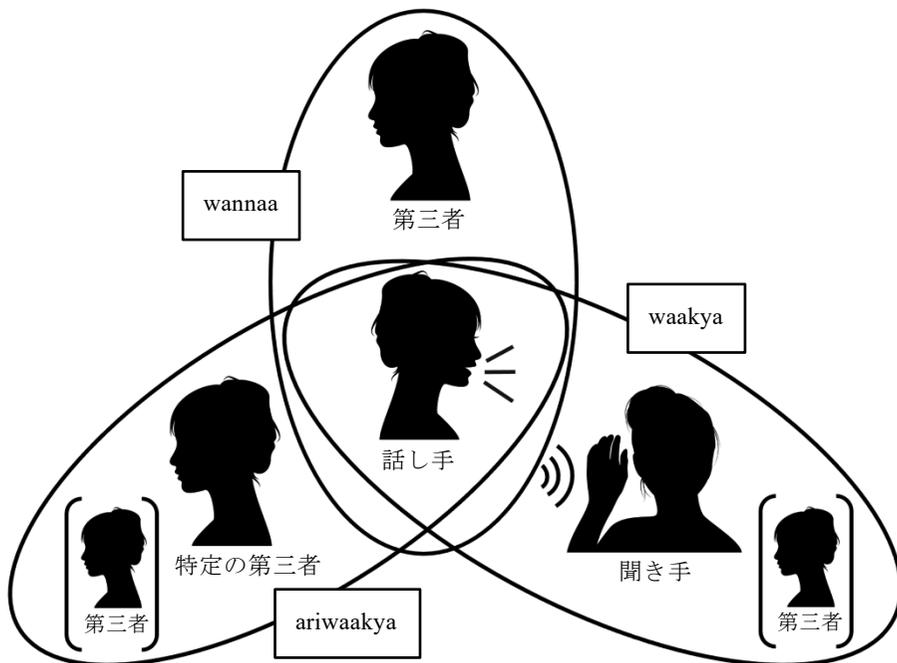


図 7 喜界島小野津方言の一人称複数体系のイメージ

## 5 おわりに

本稿では、国語教育カフェでの講演内容をもとに、筆者のフィールドワークによる喜界島方言の調査研究について、調査の方法と実際に重点を置きつつ紹介した。

COVID-19 の感染拡大のため、2020 年 2 月以降、喜界島でのフィールドワークを自粛している。その間、これまでに収集したデータで研究を続けてきたが、現在、オンライン調査にも着手しており、今後、オンライン調査と対面調査を併用しつつ、研究を進める予定である。個人としては主に疑問文を、他研究者などとの共同研究プロジェクトでは主にアクセント・イントネーション、指示詞・人称代名詞を研究テーマとしている。オンライン調査では、話者の協力がより重要になるため、話者個人及び地域コミュニティとの連携をさらに深めつつ、研究に取り組みたい。

## 付記

本稿で紹介した調査研究は、JSPS 科研費 12J06463・15J02695・16K21248・19K00646、及び、国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」「日本の消滅危機方言・方言の記録とドキュメンテーションの作成」「消滅危機言語の保存研究」の助成を受けたものである。

喜界島方言のデータは、筆者が小野津集落出身・在住の 1926 年生女性、1935 年生女性、1945 年生女性、上嘉鉄集落出身・在住の 1935 年生女性、1944 年生女性を協力者とする調査で得たものを用いた。

## 参考文献

- 岩倉市郎 (1934) 「喜界語音韻概観」『方言』4(10): 13-23.
- 岩倉市郎 (1941) 『喜界島方言集』中央公論社.
- 上野善道 (1993) 「喜界島方言の体言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』21: 41-160.
- 上野善道・西岡敏 (1994) 「喜界島方言の用言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』22: 161-312.
- 小川晋史編 (2015) 『琉球のことばの書き方—琉球諸語統一表記法』くろしお出版.
- 白田理人 (2013) 「奄美語喜界島上嘉鉄方言の談話資料」田窪行則編『琉球列島の言語と文化—その記録と継承』245-257. くろしお出版.
- 白田理人 (2014) 「奄美喜界島小野津方言の一人称代名詞の複数形」『日本言語学会第 148 回大会—予稿集』350-355.
- 白田理人 (2019) 「北琉球喜界島上嘉鉄方言の述語疑問詞について」『方言の研究』5: 33-59.
- Aoi, Hayato and Yuto Niinaga. 2016. “The Central High Vowels in Ryukyuan Languages: A Comparative Palatographic Study of Yuwan Amami and Tarama Miyako.” *International journal of Okinawan studies*, 4(1): 3-11.

(広島大学)